

## 第2節 弥生後期の縄文施文土器について

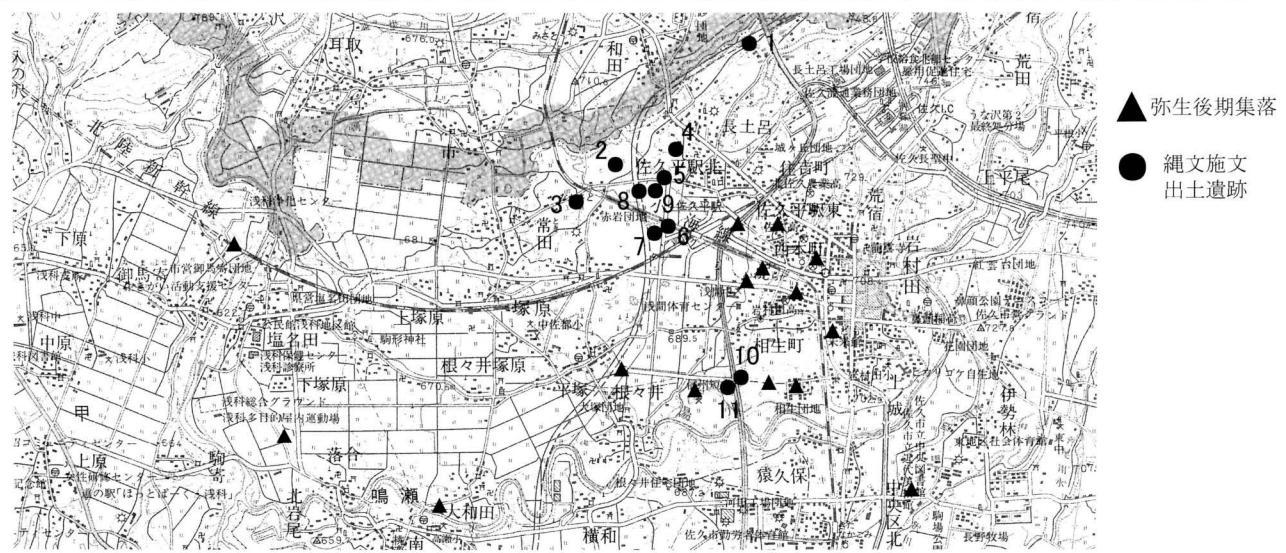
今回の調査では箱清水式土器と共に弥生後期所産と考えられる縄文施文の土器が多く出土した。これらは、所謂関東に分布域をもつ「赤井戸式土器」や「吉ヶ谷式土器」と呼ばれる土器群に似る。今日までにこれらの土器が佐久地域において一遺跡からまとまって出土したことはなかった。ここでは、これら資料を今一度精査し、今回の出土資料の位置づけを試みたい。

大豆田遺跡IVから出土した縄文施文の土器は主に土坑やU7やU11といった遺物集中区から出土しており、今回の調査された住居址からは出土していない。しかし、隣接する周防畠B遺跡からはY2号住居址やY16号住居址から全体の器形を知りうるような土器が出土し、また他の住居址からも破片資料であるが出土している。遺物集中区でも述べたが、U7やU11の土器群は西側に展開する集落址から持ち込まれた可能性が指摘できる為、これら縄文施文の土器群は今回の調査範囲でも西側に展開する集落や接する周防畠B遺跡の集落内で使われていたものと推測される。

佐久地域で弥生後期段階のこれら縄文施文土器の出土遺跡としては、管見に触れたものとして下記の表と地図にまとめた。

第1表 縄文施文土器出土遺跡一覧表

	遺跡名	遺構名	種別	形 状	時期
1	近津遺跡群	遺構外	甕	輪積み痕口縁部	折り返し甕
2	西近津遺跡IV	D54	甕	頸部破片 縄文RL	覆土より
3	上大豆塚遺跡	H1	甕	接合後にほぼ完形	甕
		遺構外	甕	胴部破片 単節縄文RL	2片出土
4	宮の前遺跡 I・II	D93	甕	胴部破片	弥生井戸
		H109	甕	胴部破片 単節縄文RL	弥生後期
5	大豆田遺跡 I・II	M8	甕	破片	
6	辻の前遺跡	H7	甕	輪積み痕口縁部	2片出土
		H1	甕	口縁部破片	2片出土
7	辻の前遺跡 II	H3	壺	口縁部から頸部	弥生後期後半
		H3	甕	胴部破片	弥生後期後半
		SB55住居	不明	区画線あり、破片	弥生後期
8	周防畠遺跡群	SB77住居	壺?	破片	4片覆土より出土
		SM509方形集溝墓	甕	口縁部破片	覆土より
		SD05号溝址	甕	口縁部破片	覆土より
9	周防畠B遺跡	Y2号	甕	口縁部から頸部	弥生後期前半
		Y16号	壺	頸部から胴部	弥生後期前半?
10	西一本柳遺跡X I	M1	甕	輪積み痕口縁部	十王台式出土
11	西一本柳遺跡X	H27	壺	赤彩壺の頸部破片	弥生後期前半



第4図 縄文施文土器出土遺跡位置図

これらの分布図から解ることは、明らかに佐久地域内の弥生後期集落の中で縄文施文土器を出土する遺跡が偏るということである。一番の中心は今回調査が行われた大豆田遺跡周辺で、今一步微細にみると土器器形が解るようなものを出土するのは、低地に近い或いは低地内微高地に立地する遺跡であり、台地上に展開する大規模集落内からは今のところ出土報告がない。今一つの位置は西一本柳遺跡周辺である。ただ、こちらの範囲からはいずれも小片の出土に止まっている。このように、佐久地域における縄文施文土器を出土する遺跡は極めて限定された遺跡からの出土であり、尚且つその中心は今回調査が行われた大豆田遺跡IVの西側を含む周防畠B遺跡で検出された集落であることが予想される。

では、現在までに当地域においてどのような土器が出土しているか整理してみたい。先に掲載した表でも解るように、その主体は甕であり、少量の壺が含まれる。赤井戸並びに吉ヶ谷土器系譜と考えられる高坏や吉ヶ谷式で特徴的な壺口縁部の突帯状粘土帯に刻みを施した飾りの壺などは見られない。ただし、本遺跡のM10号溝状遺構出土の高坏脚部(第106-31)などは坏部と脚部の接合部に吉ヶ谷式に見られる突帯状の粘土帯が巡る。このような形状は箱清水式には見られず、或いは赤井戸・吉ヶ谷式の影響とも考えられる。まず壺については第5図に示した1～3が壺と考えられる。しかし、1と2は器形が箱清水式と考えられ、施文のみが影響を受けている。3は赤彩が施された壺で、縄文施文が段状になる赤井戸・吉ヶ谷式に近い。甕は今回多くの形態が出土している。ただし、全容を把握できる土器は少ない。4は壺か甕か判断に苦しむが、器形と縄文施文は赤井戸・吉ヶ谷式に近い。しかし、両形式が行わない沈線による区画を施す点は箱清水式的である。7はほぼ完形の甕で、口唇部に刻みを持ち、胎土も在地とは異なる感じがある。11～13は赤井戸・吉ヶ谷式に特徴的な輪積み痕を残す縄文施文の甕口縁部である。7と11～13は搬入品の可能性がある。他のものは器形が箱清水式のものが多く、櫛描を縄文に置き換えたようなものも多い。また14のように赤井戸・吉ヶ谷式ではあまり見られない口縁部に無文帯を持つ土器がある。胎土も在地としてはやや異なる感がある。箱清水式の甕でも口縁部に無文帯を持つ資料はあまり見受けられない。このような文様構成は信州にあって中期栗林的な要素であり、関東側では後期の樽式や岩鼻式に見られる文様構成と理解している。14のような土器は在地化と考えるべきなのか、或いは群馬県前橋市荒砥北三木堂遺跡31号住居址から出土している中期後半の縄文系土器に似ていると思うのは無理があろうか。

このように、今回の大豆田遺跡からの出土資料の多くは縄文施文土器と概に言っても、赤井戸・吉ヶ谷式がストレートに地域内に搬入されているというものではなさそうである。佐久地域で変容し、在地化とまでは言わなくともオリジナルからだいぶかけ離れた土器群と捉えられよう。では、なぜこのような土器が一遺跡からまとまって出土するのであろうか。住居址内から出土する多くの土器は在地箱清水式である。そこに混在するように縄文施文土器が出土するということは、集落全体での人々の移入ということは考えづらい。とすれば婚姻や少人数の移動などが考えられるが現況の考古学的資料ではここまでである。ただ、今一度確認したいのは、大小さまざまな後期箱清水期の集落が展開するこの地域で、大豆田遺跡のみにこのような土器が集中して出土する理由は、今後考えていかなければならない大きな課題の一つである。

最後に今回の資料は、並行関係が追えれば赤井戸・吉ヶ谷式成立の問題にも一助となるのかもしれない。ただ、今回は縄文施文土器しか取り上げなかつたが、この問題をまとめるにあたって、櫛描文土器である樽式や岩鼻式の土器の搬入について考えていかなければならない事に気づいた。従来より弥生中期栗林段階から北陸や北関東からの外来系土器については注視がされてきた。しかし、中期・後期段階における関東側からの竜見町式・樽式の地域内への搬入がどのような様相であるのか把握はされていない。この問題を扱うことが今回の縄文施文土器の位置づけをより一層深化させることにつながる。佐久地域はその立地から特に取り組まなければならないと考える。今回は紙面の都合上ここまでとして、改めて別稿としたい。

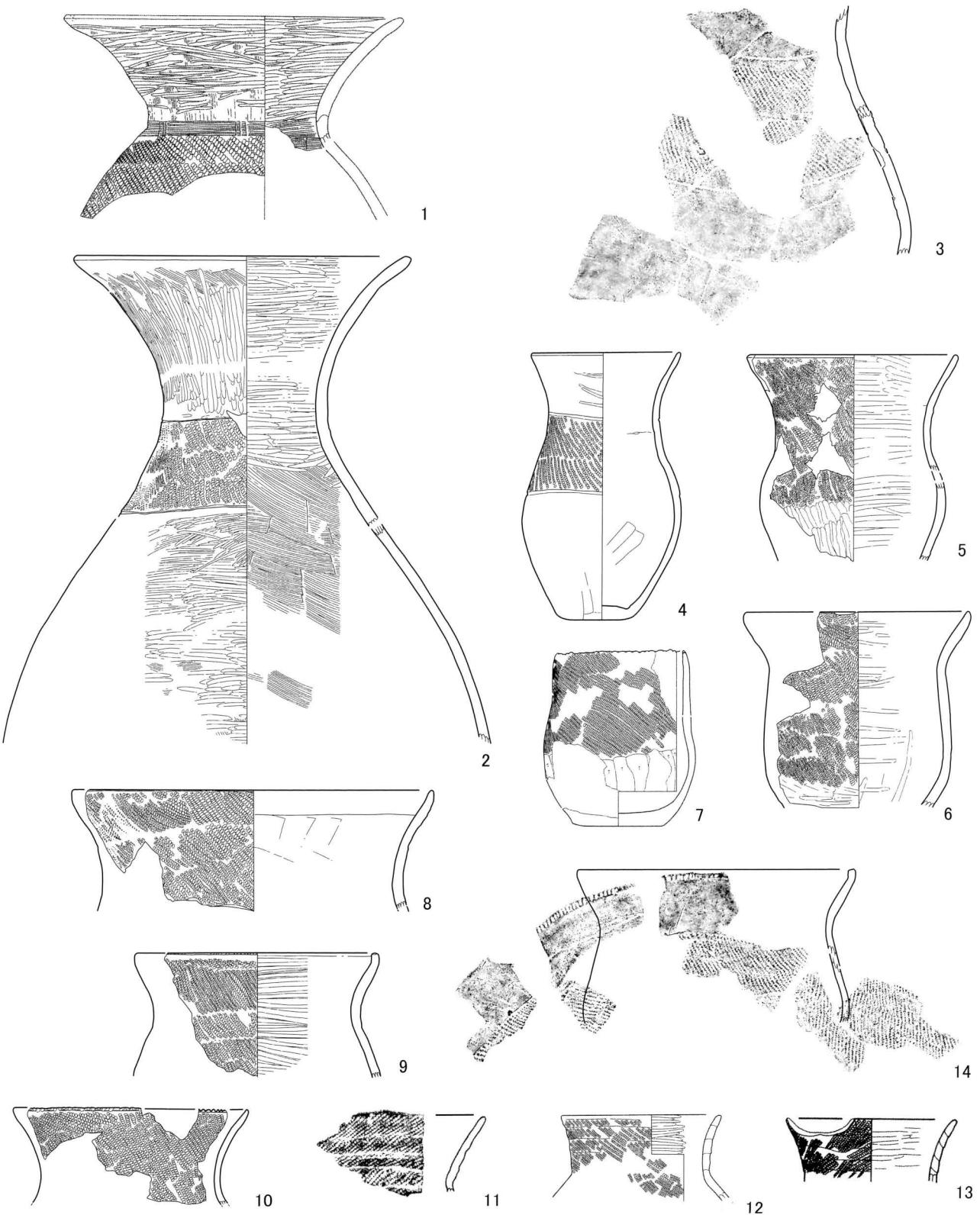
#### 参考文献

大木紳一郎 1991 「赤井戸式の祖型について」『研究紀要』8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

2007 「岩鼻式と樽式土器」『埼玉の弥生時代』埼玉弥生土器観会

柿沼幹夫 1982 「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会

なお、大木紳一郎氏と柿沼幹夫氏には本資料の実見ご教示を頂いたが、本報告書でご意見を反映出来なかつた。記してお詫びと御礼を申し上げたい。



1.辻の前II 7.上大豆塚 11.西一本柳X I 12.近津遺跡群 13.辻の前 その他は大豆田IV

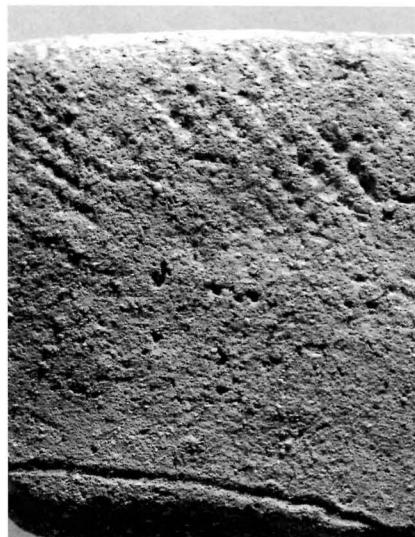
第5図 佐久地域出土の関東系縄文施文土器



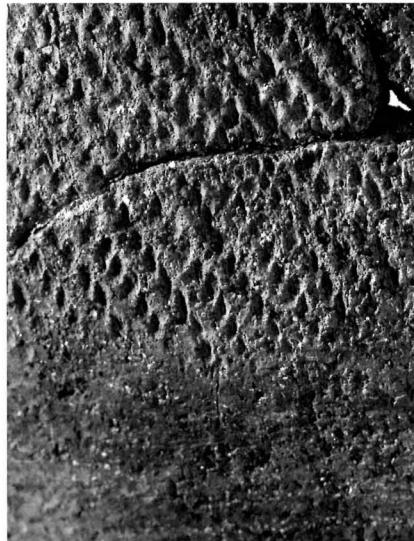
D22-5(口縁部)



U11-85



U11-57



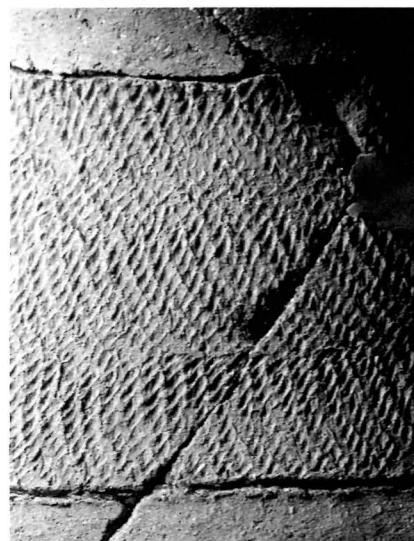
D22-5(胸部下半)



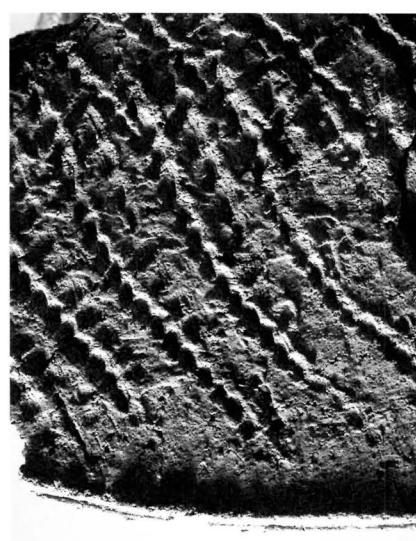
D48-7



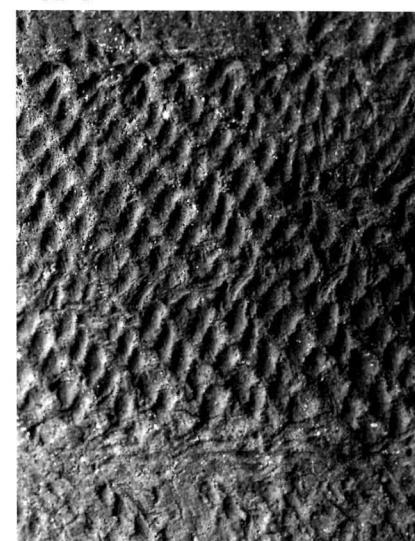
U2-4



D104-1



U11-29



Gr-25